

楽都の唄

宮本鐵雄

松本市は「がくと」と称し、学都・岳都・楽都といろいろな文字を当てています。中でも、小澤征爾総監督のサイトー・キネン・フェスティバルが定着して、「楽都」として名を揚げていますが、歌謡曲好きとしては一寸肩身の狭い思いをしていました。

そんな折、知り合いの歌手が、作曲・発表した唄を聞いて楽しくなりました。それは松本城の太鼓門復元の記念祭りに因んで作られたものですが、松本城と加藤清正と駒つなぎの桜を主題とした詩吟入りの叙情的な歌謡曲です。

加藤清正の一行が松本城に立ち寄った時、城主の石川玄蕃頭康長が手厚くもてなした後「二頭の駒のうち、お気に召した一頭を献上します」と申し出をしました。これに対して加藤清正は「目利きでもないのに選ぶのは失礼と考えるので、二頭共に頂戴する」と答え、傍らの桜に駒をつないだそうです。これが今も城内に残る「駒つなぎの桜」のいわれですが、このときの振舞いを伝え聞いた人々は、さすが加藤清正公と感じ入ったということです。しかし、私は好意に甘えすぎて自分勝手に強欲であるという見方も出来るのではないかと、思っていました。

また、この話で興味が湧くのは、「手厚くもてなした」の部分です。さぞかし、贅沢な酒肴だけでなく、笛太鼓など華やかに演奏され、今の「楽都」の名に恥じない宴会であったことだろうと想像されます。

この唄のように、その内容・背景を想いながら鑑賞すると、クラシックとは趣を異にする楽しみ方が生まれて、「楽都松本市」の内容やイメージも広がるのではないかと、歌謡曲ファンとして考えています。

